



TITLE:

黄巾の亂の宗教性：太平道教法との 関連を中心として

AUTHOR(S):

秋月, 観暎

CITATION:

秋月, 観暎. 黄巾の亂の宗教性：太平道教法との関連を中心として. 東洋史研究 1956, 15(1): 43-56

ISSUE DATE:

1956-07-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145876>

RIGHT:

黄巾の亂の宗教性

——太平道教法との關連を中心として——

秋 月 觀 嘆

一

中國史上に記録される大小無數の反亂中、何等かの宗教性を帶びるものが極めて多い事實は、既に諸家の指摘するところであるが、それらの教匪或は妖賊と呼ばれる反亂の中で特に注目を要するのは、濃厚な宗教的性格と巨大な世俗的勢力とを併有し、後漢王朝の崩壊と、それに續く中國の長い分裂状態を生み出す事に主導的な役割を演じた太平道教團の反亂、即ち所謂黄巾の亂であらう。

從來、黄巾の亂に關する研究としては、原始道教の成立をめぐる道教史の立場から太平道を取擧げた二三の論考が存するが、それらは何れも太平道の教法と教團の社會的行動、或は張角の創唱する教法と張角の行迹についての個別・分析的研究に終始し、兩者に對する統一的・發展的な

考察を缺いているため、黄巾の亂の本質に關しては勿論、太平道の宗教史的把握に於いても甚だ不充分なものゝある事を免れなかつた。従つて、拙稿は此等の點を考慮しつゝ、黄巾の亂と太平道教法との思想的關連を追求し、専ら黄巾の亂を貫く基本的な宗教性を明かにしたい。黄巾の亂が太平道教團を主體的勢力としている限り、その教法の究明こそ黄巾の亂の實體を解明する重要な鍵であるからである。

たゞ極めて零細にして不十分な史料を利用する試論の域に止まらざるを得ない事は遺憾であるが、從來、論すべくして論ぜられなかつた原始道教の宗教性に關して一二の卑見を述べる事も無意味ではないであらう。

二

まず、行論の便宜に従い、黄巾集團の社會的性格、特に

太平道教法との関連に於いて注目される二つの點を豫め指摘し、以て敘述の足場としたい。

その第一は太平道の教團が單純な宗教結社ではなく、史料に見出される最初から既に政治的性格を有している事である。太平道の集團勢力が始めて史料に現れるのは、中平元年(A.D. 184)彼等の武力蜂起を溯ること約十年に當る熹平五・六年(A.D. 176~7)の事であり、當時司徒の地位にあった楊賜の上書によれば、

張角等赦に遭つて悔いず、而して稍益滋蔓す。今若し州郡に下して捕討すれば、恐らく更に騷擾し、速に其の患を成さん。且に切に刺史二千石に勅して、流人を簡別し、各を護つて本郡に歸し、以て其の黨を孤弱ならしめんことを欲す。然る後其の渠師を誅せば、勞せずして定まるべし。何如ぞ。
後漢書、卷八
十四、楊賜傳

と見えて居り、太平道は早くも熹平年間、後漢王朝をして強引な彈壓を躊躇せしめる程の大きな世俗的勢力を形成していた事を窺わしめる。のみならず「赦に遭いて悔いず云云」と述べている事實は、それ以前に於いて既に太平道に對する政治的壓迫が加えられていた事を示唆している。然

らば太平道が斯様に早くから爲政者の政治彈壓を被つたのは何如なる理由に基くのであろうか。こゝで注目されるのは同じ上書が、それを簡別し郷里に歸す事によつて太平道の勢力を孤弱ならしめ得ると説いている「流人」の存在であつて、太平道の集團を構成する主要な分子が土地を失ひ郷里を離れて流浪する脫落・貧窮農民によつて占められていたと推定される事である。農村に於ける階級分化及び土地兼併の激化が重大な政治的課題とされていた後漢末期に於いて、農民をして「財産を棄賣し、流移犇赴し、道路を填塞」³⁾八、資治通鑑卷五十
八、光和六年條せしめる如き集團があるとすれば、その集團は性格・行動の如何に拘らず爲政者の排除するところとなる事は必定であるのみならず、太平道の教團は、この段階に於いて既に政治的逆謀の意圖を有していたもののように、劉寛は光和年間、豫め黃巾の逆謀を先策した功績によつて遼郷侯六百戸に追封せられて⁴⁾いる。斯様な政治的意圖は太平道が成立當初から懷いていたものなのか、或は本來純粹な宗教結社であつた太平道が何等かの原因によつて政治的性格を帯びるに至つたのか、俄に斷定を下すべき史料に乏しいが、上述の如く脫落・貧窮農民を主體とす

る教團の階級的な偏向性が、その内部に後漢王朝の政治に對する不滿を鬱積せしめていたとしても、敢て異とするには足りないであらうし、同一の信仰によって結ばれた此の教團に對する權力的な彈壓・干渉が、却つて、その結束を強化し、反權威的政治的性格を助長する結果を招いた事も察するに難くない。

ともあれ、通鑑卷五十八は反亂を計畫する太平道教團の動勢について

（張）角等陰謀益甚し。四方私言して云う。角等竊に京師に入り、朝政を覬う。

（中略）角遂に三十六方を置く。方は猶將軍なり。大方は萬餘人、小方は六七千人、各渠師を立つ。蒼天已に死す。黃天當に立つべし。歲甲子に在りて天下大吉と訛言し、白土を以て京城の寺門、及び州郡の官府、皆甲子の字を作らしむ。

と述べている。これらの年代については明確を缺いているが、反亂の準備計畫として、豫め放つたと云われる「蒼天已死、黃天當立」との訛言は、彼等が反亂に際して「皆黃巾を著けて標幟と爲した」後漢書卷一〇 皇甫嵩傳 事と同様、火德王

朝漢を襲うべき土德の象徵黃色を標幟とする事によつて、天命の己にある事を暗示せんとするものであり、また「歲在甲子、天下大吉」の流言も、彼等の蜂起を豫定する光和七年（中平元年）が通鑑卷五十八 恰も甲子に當つて居り、所謂萬物一新の年に於いて天下に大吉が齎される事を豫言するものであらう。これらが彼等の企圖する革命の合理的必然性を確保し、太平即ち理想社會の實現を目差す太平道の革命運動の展開を有利ならしめんが爲の思想工作である事は疑なく、三十六方、約三十萬人にのぼる軍事組織の整備とともに、太平道教團の持つ後漢王朝に對する革命の意圖を明瞭に看取せしめるものがある。

ところが、太平道は反亂計畫の露見によつて、豫定の三月五日を待たず光和七年正月に急遽兵を挙げ、「旬月の間、天下響應し、京師震動す」通鑑卷五十八 勢を示す。斯様な狀態に狼狽する漢室は政治・軍事・財政上の力を反亂の鎮定に向けて集中した結果、漸く同年末に至つて首領張角兄弟の敗病死と共に、その勢力は微弱の様相を呈するに至る。併し、「黃巾起りてより二十餘年、海内鼎沸し、百姓流離す」三國魏志卷十 刑顗傳 と傳えられる如く、黃巾の反亂が其の後長期

間に亘つて各地に續發している事實は諸史料に明かなところである。就中、中平三年、青州に起つた黃巾の如きは

青州の黃巾衆百萬兗州に入る。(中略)鮑信諫めて曰く。

今賊衆百萬、百姓震恐し、士卒鬪志無し。敵すべからざるなり。賊衆を觀るに、羣輩相隨ひ、輜重無し。唯鈔略を以て資と爲す。(中略)濟北に至つて降らんことを乞う。

卒三十萬、男女百餘萬口。三國魏志卷一、武帝紀

と傳えられ、投降時に於いて、なお三十餘萬の兵卒と男女合せて百餘萬人にのぼる協力者を擁している事實は、黃巾の集團的勢力が張角等の没後かえつて増大し、依然として猖獗を極めていた事を物語っている。⁸⁾ところで、こゝで見逃し得ないのは、官軍に對し鬪志を失わしめる程の黃巾の強大な戦力の所在が、相隨う民衆の協力によつて輜重を鈔略し、全兵力を戦鬪に投入し得る點にある、と述べる鮑信の言であつて、羣輩と呼ばれる百餘萬の男女、或いは

初め張角等百姓を誑耀す。天下之に惑ひ、襁負して至る者、數十萬人。後漢紀卷二十
五、靈帝本紀

と云われる如き婦人子供をまじえる數十萬の一般民衆が太平道の反亂に對して積極的に參加協力している事實であり、

このような民衆的な性格が黃巾の亂の社會的性格に關して特に注目される第二の點である。

ところで、この様な民衆の熱烈な協力參加は果して前掲諸史料が記す如く、天下を誑惑する張角の訛言に踊りされた民衆の狂信的・盲目的行動に過ぎなかつたのであらうか。この點について後漢書^{卷七十八}張讓傳に見える張鈞の上書は、竊に惟るに、張角能く兵を興し亂をなし、萬人樂みて之に附する所以の者は、其の源皆十常侍、多く父兄弟婚親賓客を放つて、州郡を典據し、財利を辜權し、百姓を侵掠するに由る。百姓之冤、告訴する所無し。故に不軌を謀議し、聚りて盜賊と爲る。宜しく十常侍を斬り、頭を南郊に懸け、以て百姓に謝し、又使者を遣して、天下に布告せば、師旅を須いずして、大寇自ら消ゆ可し。

と述べている。この見解は稍一面的ではあるが、確に反亂の本質を衝くものがあるのであつて、權力階級の不法な經濟的侵掠に對處すべき合法的手段を持たない農民が、侵掠の結果である貧窮を脱却すべき唯一の方法を張角の革命運動の中に見出し、これに希望を托して協力參加した有様が物語っている。されば敍上の如き民衆の献身的な協力は、

必ずしも張角の訛言に踊された結果でなく、寧ろ彼等民衆の具體的な生活體驗の中から生れた社會的自覺に發するものである事が想像されるのである。

さて、斯様な黃巾の反亂も勃發以來、約二十年を経て漸くその跡を絶つ。黃巾が會つて民衆の廣範な協力によつて威勢を誇りながら、目指す後漢王朝の滅亡を目標にして壊滅し去る理由は改めて考究を要する問題であるが、ともあれ、斯の如き權力階級の不法な侵掠に對する貧窮農民の反抗を容易に吸収・組織し、長期に亘る頑強な抗戰を繼續せしめ、やがて後漢王朝の崩壞と中國の分裂を導き出す巨大な歴史的エネルギーたらしめたものは、果して何であつたのか。此處に至つて吾々は黃巾の亂の主謀者である張角によつて創唱された太平道の教法に對して、新たに検討を加えるべき段階に到達する。

三

さて、太平道の教法を考察するに當つて、道藏太平部に収められている現存太平經が「張角、頗る其書有り焉」

後漢書、卷六
○下、襄楷傳 と傳えられる太平清領書と全く別個の存在であり、それを以て太平道教法研究の直接資料となし得ない

とすれば、次に最も重要な手掛りとして浮び上ってくる史料は

張角、自稱大賢良師、奉持黃老道、畜養弟子。跪拜首過、符水呪說、以療病。病者頗愈、百姓信向之。角因遣弟子八人、使於四方、以善道教化。天下轉相誑惑、十餘年間。衆徒數十萬。連結郡國、自青徐幽冀荊楊兗豫八州、莫不畢應。後漢書卷一〇
一、皇甫嵩傳

であろう。これによれば、太平道の教説は概ね療病を本旨としたものゝようで、人間の病苦の原因を當人の罪過に歸し、過去の罪過を懺悔・告白せしめ、靈力をもつ符水及び呪說によつて病氣を治療した事、而してこの治療法の効果が大きいに擧がつて頗る民衆の信仰を集め、僅か十餘年の間に華北八州にわたつて數十萬の信徒を得た事が窺われる。併しながら、太平道の教法は必ずしも斯様な呪術的な療病信仰だけではなかつたようで、皇甫嵩傳は續いて「角因つて弟子八人を遣し、四方に使せしめ、善道を以て教化せしむ」と述べ、通鑑^{卷五十八}はまた「角善道を以て教化し、民の歸する所となる」とも述べている。更に劉陶傳^{後漢書卷八十七}には張角の逆亂を非難して「鉅鹿の張角、大道に僞托し、小

民を妖惑す」と記され、何れも療病以外に何等かの教説の存在した事を示唆している。或は陶謙が魏の太祖曹操に奉った上書に於いて「妖寇の類聚、殊に死を畏れず」三國魏志卷七、陶謙と述べ、太平道の衆徒が戦闘に當つて死を畏れる事が無かつたと傳えて居り、これまた太平道教法に於けるより深い宗教的信仰の存在を暗示するものがあるからである。

斯様な推測の上に立つて前掲皇甫嵩傳の史料を再検討するるとき、まづ注目されるのは、從來「如何なる意味のものか断定し難い」として太平道教法考察の対象から除かれてきた「黃老道」なるものについてある。¹⁰⁾ところで、筆者は曾つて中國古代思想に於ける黃老觀念の變遷を辿り、本來、道家の祖師を意味した黃老の觀念が後漢末に至つて遂に神格化され、黃老君に對する宗教的祭祀によつて長生福祥を求める黃老信仰を形成してゆく過程を追求したのであるが、¹¹⁾前掲皇甫嵩傳に張角が奉持して以て弟子を蓄養したと云われる黃老道こそ、實は太平道教法に導入された所謂黃老信仰を指すものに外ならないと考えるのである。

かゝる推定を直接に確證する史料は遺憾ながら見當らないが、併し太平道の教法が單に呪術的療病法の上に止まら

ず、所謂黃老信仰と同様、祭祀によつて長生福祥を求める教説を唱え、而してそれが教團の隆盛を齎す原動力となつていた事實を示す史料は決して少くないのであつて、例えば葛洪は

曩に張角・柳根・王歆・李申の徒有りて、或は千歳と稱し、小術に假託し、(中略)進みては年を延べ壽を益すを以て務と爲さず。退きては災を消し病を治すを以て業と爲さず。遂に以て姦黨を招集し、逆亂を稱合す。(中略)

余、親しく識る所の者數人を見るに、了に神明を奉ぜず、一生祈祭せざりしも、身は遐年を享け、名位巍巍として、子孫蕃昌し、且富み且貴し。抱朴子卷九 道意篇

と述べ、太平道の張角等が延年益壽・消災治病を唱えて愚昧な民衆を惑し集めながら、専ら奸黨を招集して逆亂を謀つたと非難し、彼等の説く延年・治病・消災の教説が如何に信じるに足らないものであるかを力説して居る。由來、葛洪は神仙道の正統派を以て自負して、金丹による仙術を説かず専ら祭祀によつて長生福祥を求めんとする民間信仰の隆盛に深い反感をいだき、屢々「長生の道は祭祀して鬼神に事うるに在らざる也。(中略)昇遷の要は神丹に在る也」

抱朴子卷四 等と執拗な非難・攻撃を浴びせているのであつた。

抱朴子に見られる其等の言辭こそは、却つて其處に於いて群愚と貶される大衆の具體的な宗教的欲求と、それに適應して彼等の信仰を集めた太平道その他の民間信仰の教説を窺わしめ、張角が治病（療病）のみならず延年益壽（長生）及び消災（福祥）を祈求める教説を唱えていた事を推測せしめるものがある。

この點は曲陽泉水上に於いて太平清領書を得たと傳えられ前掲議 太平道の開祖とも見られる于吉が、衆心を幻惑する者として南方吳會の地に於いて孫策によつて殺害された際（建安五年頃）、

諸事之者、尙不謂其死、而云尸解仙焉。復祭祀求福。

三國吳志、卷四六、孫策傳、裴註所引江表傳

と云われ、于吉の弟子達が師の尸解仙を信じ、登仙した神仙于吉を祭祀して以て彼等の福祥を祈求めたと傳える事によつても、裏書きすることが可能であるが、同じ江表傳には更に于吉と神仙道との關係を示して

吉乃盛服、杖小函、漆畫之、名爲仙人鐔。同上

と述べ、又さきの皇甫嵩傳と並んで太平道教法の基本的史

料である三國魏志卷八張魯傳の裴註は、太平道と神仙道との關連を窺わしめるところの

太平道者、師持九節杖、爲符祝、教病人叩頭思過、因以符水飲之。

との典略の記事を引いている。こゝに云う九節杖が神仙の象徴とされる竹杖を指す事は既に先學の指摘されたところであるが、これは單なる象徴或は單なる技術的な呪術の對象に止まらず、既に宗教的對象とされた神仙の神靈の象徴・住所とされたものである事は一讀して察するに難くないところであつて、太平道の教師が斯かる九節杖を奉持している事は、神仙の本質的性格である不老長生に關する信仰が太平道教法に含まれていた事を示唆するものがあるであらう。

元來、人間の病苦を逃れようとする欲求は、少くとも直接經驗に於いて病氣の肉體的・感覺的苦痛を避けんとする事であるが、この欲求は病氣の結果として現れる死の恐怖と結附く事によつて最も切實なものとなる。一方、生に對する執着は現世的享樂・幸福を永續せしめんとする欲求によつて最も強く裏附けられている事は否定し難いところで

あり、療病を説く太平道が併せて長生福祥を唱える事は一
般的な宗教経験の立場からしても極めて合理的な必然性を
有している。のみならず死に對する合理的な解決が従前の
仙術によつて現實に求められない限り、不死の欲求が長生
福祥を祈求める宗教的願望として現れる事は極めて自然で
あると云わなければならないからである。

斯様に推究を重ねて來るならば、祭祀の對象こそ明瞭を
缺くが、所謂黃老信仰と同一の信仰型態である祭祀によつ
て長生福祥を祈求める教説が太平道教法に存していた事が
推察され、前掲張魯傳に張角が奉持して頗る民衆の信仰を
集めたと傳える「黃老道」こそ太平教法に導入された黃老
信仰を指すものと推考されるのである。

ところで、斯様な推定に對して疑問に思われるのは、黃
老信仰と太平道との間に存する階級的性格の矛盾、即ち元
來、上層支配階級を社會的な基盤として成立した黃老信仰
——この事は單に史料の制約によつて現れた結論ではなく、
黃老信仰の根底に横わる神仙思想のもつ階級的性格の歴史
的な表現である——¹⁵⁾が脱落實貧農民を主體して構成される
太平道の教法に導入された事についての質疑であらう。こ

の點については既に前掲拙稿に於いて、黃老信仰が註(15)
に類型した幾つかの仙術——限られた人間の主體的努力に
よつて不老不死を追求せんとする自力的な手段——を否定
し、黃老君に對する宗教的祭祀によつて長生福祥の恩寵を
祈求めんとする他力的な性格を有している事を指摘したが、
張角は斯かる宗教的信仰の救済に潜む超階級的平等性・無
制約性、所謂他力易行道的傾向を巧に捉え、これと當時民
衆の根深い信仰を集めていた巫祝道的・呪術的信仰とを結
合する事によつて黃老信仰の階級的制約を除去し、これを
下層一般民衆に解放する太平道教法の創設に成功したもの
と考えられる。

さて、斯の如く療病法に加えるに長生福祥の恩寵を以て
する太平道は、確に人々の心を索附けるに足る新教説とし
て民衆の前に出現したであらう。併し、太平道が彼等民衆
を容易に吸収し、極めて短期間に驚くべき發展を遂げ、大
大な社會的勢力を形成している事實は、必ずしも斯かる教
説の魅力のみをもつてしては理解し難いものがあるのであ
つて、後漢末の民衆を太平道に結附ける何等かの直接的な
機縁、より身近な具體的な契機が存在が豫想されなければ

ならない。この事は同時に後漢時代、幾多の類似宗教結社の存在にも拘らず、ひとり太平道が強大な社會的勢力の結集に成功する、もう一つの社會的な條件を解明する事でもあるのである。

四

さて、絃上の如き觀點から注目すべき事は、太平道の生成發展の時期である後漢末期が中國史上稀に見る疫病の大流行期に當つて居り、兩者が時期的な一致を示している事である。試みに後漢書に現れる年代の明瞭な疫病流行の記録を摘出し、年代順に整理すれば大體次の如くなる。

建武十三年 (A.D. 37) 楊徐部大疫、會稽江左甚 (五行志注)

建武十四年 (A.D. 38) 是歲會稽大疫 (孝武本紀)

會稽大疫、案此則頻歲也 (五行志)

會稽大疫、死者萬數 (鐘離意傳)

建武廿六年 (A.D. 50) 郡國七大疫 (五行志注)

元初六年 (A.D. 119) 夏四月、會稽大疫、遣光祿大夫

將太醫循行、疾病賜棺木、除田

租口賦 (孝安帝本紀)

延光四年 (A.D. 125) 冬京師大疫 (孝安帝本紀、五行志)

永建元年 (A.D. 126) 十一月疾疫 (孝順帝本紀)

元嘉元年 (A.D. 151) 春正月、京師疾疫、使光祿大夫將

醫藥案行 (中略) 二月九江廬江大疫、

甲午河間王建薨 (孝桓帝本紀)

正月京師大疫、二月九江廬江大疫 (五行志)

延熹四年 (A.D. 161) (正月) 大疫 (孝桓帝本紀)

正月大疫 (五行志)

延熹九年 (A.D. 167) (正月) 己酉詔比歲 (中略) 有旱水疾

疫之困 (孝桓帝本紀)

建寧四年 (A.D. 171) (三月) 大疫、使中謁者巡行、致醫

藥 (孝靈帝本紀)

三月大疫 (五行志)

熹平二年 (A.D. 173) 春正月大疫、使常侍中謁者巡行、

致醫藥、丁丑司空宗俱薨 (孝靈帝本紀)

光和二年 (A.D. 178) 春大疫、使常侍中謁者巡行、致醫

藥 (孝靈帝本紀)

春大疫(五行志)

光和五年 (A.D. 183) 二月天下大疫(孝靈帝本紀)

二月大疫(五行志)

中平二年 (A.D. 185) 春正月大疫(孝靈帝本紀)

正月大疫(五行志)

建安廿二年 (A.D. 217) 是歲大疫(孝獻帝本紀)

大疫(五行志)

これによれば後漢時代約二百年間に記録される十七件の疫病流行の記事中、その十件までが桓靈二帝の治世約三十五年の期間に集中し、略平均三年に一度の蔓延を示している。勿論この様な記録に對する數字的な操作の結果を其儘信用する事には慎重を要するが、兎角この期間の異常に高い發生率は注目に價する。又これを地域的に見ても、特に桓帝以後流行地域を限定せず、單に大疫或は天下大疫と記すものが増加する。一方これと比例して桓帝以前には全く現れない朝廷の醫藥による防疫對策の記事が頻出してゐる事は、後漢時代に於ける疾疫流行の被害が桓帝以後地域的に其の規模を擴大し、更に深刻化した事を示すものであらう。加えて、この時期は後漢の政局が既に動搖し、社會的・經濟

的な混亂が日々その激しさを増しつつあつた際であり、繰返す疫病蔓延の惡條件が更に民衆の生活を深刻な苦境に追込んだ事は察するに難くない。

永建元年に奉られてゐる張衡の封事は、早くも疫病の流行によつて惹起された社會不安の狀態を

臣竊に見るに、京師害され、兼ねて及ぶ所民多く病死す。死して戸を滅する有り、人人恐懼す。朝廷焦心、以て至

憂と爲す。後漢書卷四十五、五行志注

と述べてゐる。後漢の朝廷は頗る是を憂慮して、前掲の如く屢々醫藥を巡行せしめて防疫に努めるが、別段の効果も挙げ得なかつた如くであつて、魏の曹植(文帝)の陳思王集、¹⁸⁾ 說疫氣の條には

建安二十二年、癘氣流行し、家々僵尸之痛有り、室々號泣之哀有り。或は門を闔して瘞れ、或は族を覆つて喪う者

と記され、多數の民衆が疫癘に侵されて倒れ苦しみ、一門一族を擧げて死没する者も少なくなかつた悲惨な狀態を傳へてゐる。ところで、續いて陳思王集が

或は以て疫は鬼神の作す所と爲し(中略)而して愚民符を

懸けて之を厭う。

と明かに指摘する如く、疫病の蔓延下に死の不安に怖える民衆が疫癘の流行を鬼神の所爲と信じ、専ら符を懸ける呪術的手段を以て病苦を免れん事を求めていたとすれば、これら民衆にとって符水呪説・療病・長生福祥を説く前述の如き太平道の教説が如何に大きな救済の光明として映じたか、察するに餘りあるものがある。されば

八州之人、畢應ぜざる莫く、或は財産を棄賣し、流移奔走、道路を填塞す。未だ至らずして病死する者、亦萬を以て數う。郡縣その意を解かず。反つて言う、角善道を以て教化し、民の歸する所となると。通鑑卷五十八
光和六年

の如き状態を現出した事も敢て異とするに足らないであろう。就中、傍點を附した一見理解し難い一節こそは、太平道教團の少なくとも初期に於ける急激な發展の重要な契機が敍上の如き疫病の蔓延にあり、病死の不安に怖える多数の民衆が太平道の教説を慕い、所在の教團に向かつて陸續として參集した事を如實に物語るものと云えよう。果して、劉焉傳には更に俱體的に

是時(中平五年六月)、涼州の馬相趙祗等、綿竹縣に於い

て、自から黃巾と號し、疾疫之民、一二日中數千人を合聚し、先づ綿竹令李升を殺し、吏民を翕集し、萬餘人を合す。(中略)旬月之間、三郡を破壊す。三國蜀志
卷一

と見え、かゝる推測の誤りでない事を示している。

ところで、斯如く黃巾を號する太平道が短時日の間に疾疫の民を合聚し、更に吏民を加えて集團的勢力を結集し、反政府的な行動に強力な力を發揮する事を容易ならしめてゐるものは、既述の如き太平道教法の教理的合理性と社會的適應性の生み出す教説の魅力にあつたと考えるのであるが、此處に於いて顧みなければならぬ事は、太平道がかねて革命による太平の實現——社會的實踐による理想社會の樹立——を標榜し、下層民衆に對する現實的・政治的救済を打出している事であつて、前述の如く民衆をして「樂みて之に附」せしめ「糧負して至る者數十萬」たらしめてゐる事實を見逃してはならないのである。

五

さて、以上の如く太平道の療病・長生福祥を祈求める現世的救済の教説及び太平社會の實現を標榜する積極的な實踐運動の動勢とを分析・検討して來るならば、自から兩者

の間に共通する思想的基盤の潜在している事が見出されるであろう。即ち社會的實踐運動を展開する教團の現世的・政治的性格が教説を貫く現世的性格——太平道教説の最高價值が療病・長生換言すれば現世の無限の延長にある事實によつて明瞭であろう——と同一の思想的基礎の上に立ち、太平道教説に於ける宗教的理想と教團の行動を規定する社會的理想とが、共に現世主義的精神によつて媒介・統一されてゐる事實が明かに看取される。

斯の如き太平道教法の教理的構造は教法の宗教的體驗者をして（教團参加の直接的機縁が疾病苦・死の恐怖・現世執着・社會的不遇・政治的不滿等の何れにあるを問わす）凡て教團の唱導する社會的實踐即ち革命の必然性と正當性を宗教的確信にまで高めしめる。一方、かくて高揚される理想社會實現の確信は、更に療病及び長生福祥に對する期待と信仰を深めてゆく宗教經驗の發展の契機を秘めてゐる事を見逃してはならないのであつて、民衆の現世的欲求の上に統合される太平道の宗教的信仰と社會的信條とが、相刺戟し合いながら教團の宗教的熱情と精神的結束を強め、延いては衆徒をして「死を畏れず」官軍將卒の「鬪志を奪

つて敵すべからざ」らしめたものと推測されるのであつて、斯くの如き太平道教法の教理的構造に張角の創造的な宗教體驗を見出し得るのである。

以上を要するに、後漢末民衆の中に漲る切實な宗教的・社會的欲求に餘すところなく適應する太平道の教法は、繰返し大規模な蔓延を續ける疫癘の恐怖、政治的・社會的混亂の中から析出される脫落・貧窮農民に深刻な生活體驗を通じて急速に普及・擴大し、彼等民衆の熱烈な信仰を集めてゆく。かくして吸集・組織される太平道の衆徒は、やがて黃巾の主體的勢力を形成しつゝ、宗教的確信に基く社會的實踐に献身的に協力参加する。されば黃巾の亂の展開に於いて太平道の果す重要な役割は自から明かであり、黃巾の亂を推進める精神的エネルギー、云い換れば、黃巾の亂の生み出す歴史的エネルギーの最も主要な思想的根據を、太平道の教法、特に宗教的信仰と社會的信條とを有機的に統一強化する優れた教理的構造の中に求める事が出来るであらう。

〔註〕

①塚本善隆博士「北魏の佛教匪」（支那佛教史研究北魏篇所收）

小柳司氣太博士「童謡・圖識・教匪」(東洋思想の研究所収)
 ②大淵忍爾氏「太平道の發生と五斗米道」(加藤繁博士還曆記念東洋史論集)

福井康順博士「原始道教の研究 第二章 太平道」(道教の基礎的研究)

併しながら、この二論考は太平道研究の先蹤的・基礎的勞作であり、拙稿の「二」はこれに負うところが少くない。

③岡崎文夫博士は「支那史概説」一一五頁—一二四頁に於いて、王符の「潜夫論」崔寔の「政論」を引き後漢末の政狀について論及されている。

④後漢書(卷二十五)劉寬傳

⑤小柳司氣太博士「後漢書襄楷傳」(前掲書所収)

⑦後漢書(卷一〇一)皇甫嵩傳「詔勅州郡修理攻守、簡練器械、自函谷大谷廣城伊闕轅轅旋門孟津小平津諸關、並置都尉、召羣臣會議、嵩以宜解黨禁、益出中藏錢、西園廐馬以班軍士、帝從之、於是發天下精兵、博選將師」

⑧後漢書(卷七八)應邵傳にも「初平二年、黃巾三十萬衆入郡界、劬糾率文武、連與賊戰、前後斬首數千級、獲生口老弱萬餘人、輜重二千兩」

⑨福井康順博士「道教經典の諸相、第二章 太平經」(前掲書)を参照されたい。

⑩大淵忍爾氏、前掲論文

⑪拙稿「黃老觀念の系譜」—その宗教的展開を中心として—(東方學第十輯)

⑫⑬柳根は後漢書(卷一一二)方術傳に死者の靈魂を招きよせ百姓

を誣惑したと伝えられる劉根、王勣は神仙傳(卷一一)に載る方術の士王君(遠)の誤寫ではなからうかと想像される。

⑭板野長八博士「竹林の七賢人」(池内博士還曆記念東洋史論集)

⑮黃老信仰が専ら上層支配階級を社會的基盤として成立していると思われる事實は、單に現存史料自體の階級的制約の結果ではなく、黃老信仰の思想的背景をなす神仙思想の持つ本質的性格の歴史的表现であると思われる。所謂、神仙思想とは甚だ複雑な内容を有しているが、當面の問題である階級的性格を神仙思想の窮極の理想である不老不死の方法に限定して考察すれば、第一は、始皇が徐福に命じて東海の神山に仙藥を求めしめる(始皇本紀・封禪書・郊祀志)例に見られる如き不死藥服用の方法

第二は、呼吸・導引・避穀・恬淡無欲・造形去智等の仙術(莊子・淮南子・神仙傳)に見られる如き肉體的・精神的修練の方法

第三は、方士李少君等が漢武に對し進言しているが如き封禪の祭祀によつて登仙不死を求める宗教的な方法(郊祀志・封禪書)に分類する事が出来る。これら三つの登仙不死の基本的契機を實踐の可能性及び歴史的事實の兩面から検討するならば、神仙思想が、本來、下層民衆とは全く無縁な階級的性格を有していた事は明かであろう。黃老信仰が上層支配階級を社會的基盤として成立している事は、かゝる神仙思想の本質的な階級的性格の歴史的表现であると云わねばならぬ。

⑯王符潜夫論(浮修篇)「今多不修中饋、休其蠶織、而起學巫祝、鼓舞事神、以欺誣細民、熒惑百姓婦女、羸弱疾病之家、(中略)

不可勝數、或棄醫藥、更往事神。故至於死、不自知爲巫所欺誤。乃反恨事巫之晚。此焚惑細民之甚者也。或は後出〔四〕の諸史料によつて後漢民衆の間に盛行する巫祝道的・呪術的信仰を推察する事が出来る。

⑪試に後漢書(卷七)桓帝本紀中よりその例を求めて見ても、

(建和二年)「十月長平陳景自號黃帝子、署置官屬。又南頓管伯亦稱真人、並圖舉兵、悉伏誅」

(延熹八年十月)「勃海妖賊蓋登等、稱太上皇帝、有玉印珪璧鐵券、相署置、皆伏誅」

(延熹九年正月)「沛國戴異、得黃金印無文字、遂與陵人龍尙等、共祭井作符書、稱太上皇伏誅」

の四例を擧げる事が出来る。所謂、妖賊と呼ばれる政治的性格の強い宗教結社が數多く存在した事を察しうるのであらう。

⑫魏曹植撰、漢魏六朝一百三家文集所收

(一九五五・四・二脱稿)

〔附記〕

本稿は一九五五年五月、東北中國學會に於いて發表したものである。尙、執筆後、大淵忍爾氏は勞作「中國に於ける民族的宗教の成立」(歴史學研究第一七九號・第一八一號。一九五五年)を發表され、本稿の及び得なかつた後漢時代農村社會の諸情勢と信仰内容の推移についての鋭い分析を行われた。参照されることを希望する。

又本年に入つては、宮川尙志氏がその著「六朝史研究」に於いて黃巾の亂についての見解を發表されている事を附記する。

(一九五六・七・二四)

昭和三十一年度京都大學文學部

東洋史關係講義題目(Ⅰ)

東洋史

講義 史籍目錄學(魏晉以降)

研究 均田制の研究

中央アジア史の諸問題

中國近世思想史の諸問題(前期)

中國鄉村形態の變遷

講讀 清代公牘

宮崎教授

田村教授

羽田教授

島田助教授

曾我部講師

宮崎教授

研究

民族の交響—前二〇〇〇年紀のオリエンツ

中原教授

研究

人文地理學

日比野講師

研究

中國歷史地理

有光助教授

資治通鑑(隋・唐紀)

宋史食貨志

二十二史劄記

西洋史

世界

人文地理學

中國歷史地理

考古學

朝鮮考古學の諸問題

田村教授

佐伯助教授

佐藤助教授

中原教授

日比野講師

有光助教授

有光助教授

a few points that have not yet been clarified; the location of T'a-li-han, the place where the Taoist was received in audience by Chingis Khan, etc. The present author tries to identify T'a-li-han not with the present Taliqan but with Kunduz and to prove that Ch'ang-ch'un did never go into or beyond the Hindu-kush.

Religious Factors in the Yellow Cap Rebellion

Kan-ei Akizuki

Without understanding the social and economic background of the closing days of Later Han, it will be difficult to grasp the meaning of the Yellow Caps who played a leading role in disrupting the ancient Chinese Empire. Since the nucleus of the Yellow Caps consisted of the followers of T'ai-p'ing Taoism, this creed will provide the key to elucidate the nature of the great rebellion. The idea has been current that the creed of T'ai-p'ing Taoism was nothing but simple penitence and incantation, which were intended to cure illness. But certainly this was not all. By that time there was already in existence the worship of deified Huang-ti and Lao-tzu who were supposed to confer the believers with longevity and wealth and happiness. This creed, called Huang-Lao-Tao, occupied an important place in T'ai-p'ing Taoism. Participation in mass of the peasants in the rebellion seems largely due to another phase of T'ai-p'ing Taoism, i.e., its charity organizations for helping the poor.